

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

No.9 CONTENTS

About dish of the ltaji ware excavated from the Maehara Site
Egami Megumi

Tateno (Hiyamizu) kilns excavated White Satsumafor the age of “stamped product”
Department to investigate the south of the Jomon

《Result of the outside document investigation》

Manufacturing Techniques and Variability: Incipient Jomon Pottery from the Sankakuyama
I Site, Kagoshima, Japan
Fumie Iizuka, Masami Izuho, Pamela Vandiver, and Koji Okubo

《Materials of Archaeological Research》

The collection such as ancient baked salt earthenware vesselsand some consideration
Makoto Uwatoko

《Document collection》

Assembly of earthen earrings of Kagoshima Prefecture excavated
Department to investigate the south of the Jomon

Annual of Kagoshima Prefectual Archaeological Center of the 27th year in Heisei

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
December 2016

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第9号

前原遺跡で出土した土師器の坏について
— 九州中部の出土状況をもとに —
江神 めぐみ

豎野（冷水）窯跡出土の白薩摩型打ち製品の年代観
南の縄文調査室

《外部資料調査の成果から》

鹿児島県中種子町三角山 I 遺跡出土
縄文草創期土器の成形技術とその変異性の研究
飯塚文枝, 出穂雅実, パメラ・バンディバー, 大久保浩二

《資料紹介》

鹿児島県出土の古代の焼塩土器等に関する覚え書き
上床 真

《資料集成》

鹿児島県内の耳栓状土製品集成
南の縄文調査室

平成 27 年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター
2016. 12

研究紀要・年報

縄文の森から

第9号

二〇一六 鹿児島県立埋蔵文化財センター

『縄文の森から』 第9号 目 次

前原遺跡で出土した土師器の坏について

— 九州中部の出土状況をもとに —

江神 めぐみ 1

堅野（冷水）窯跡出土の白薩摩型打ち製品の年代観

南の縄文室調査 . . . 13

《外部資料調査の成果から》

鹿児島県中種子町三角山Ⅰ遺跡出土縄文草創期土器の成形技術とその変異性の研究

飯塚 文枝，出穂 雅実，パメラ・バンディバー，大久保 浩二
. . . . 31

《資料紹介》

鹿児島県出土の古代の焼塩土器等に関する覚え書き

上床 真 51

《資料集成》

鹿児島県内の耳栓状土製品集成

南の縄文調査室 . . . 61

平成27年度年報 65

前原遺跡で出土した土師器の坏について —九州中部の出土状況をもとに—

江神 めぐみ

About dish of the Itaji ware excavated from the Maehara Site

Egami Megumi

要旨

前原遺跡で出土した坏は、九州中部（熊本）で多く出土例のある手持ちヘラケズリで成形されたものである。本研究では、九州中部における坏の出土状況や器種の共伴関係の検討から、塚原古墳群丸山3号墳に伴う坏と形態的特徴や体部調整が類似していることがわかった。またそれが5世紀中頃から後半に位置づけられると明らかになった。九州南部において、坏はある程度存在するが、坏よりも高坏が出土する比率が高いと示されているように（相美2004）、古墳時代中期以降の九州南部での出土が限られるなかで、完形で出土した本資料は重要であったと考えられる。

検討結果から、九州中部では、①手持ちヘラケズリの坏が遺構内から主要器種とともに出土する傾向が強いこと②5世紀前半から6世紀後半にかけて口縁部形態や体部形態の違いからバリエーションがあること③6世紀に入ると須恵器模倣坏と共伴して出土することがわかった。このことから5世紀前半から6世紀後半において、土師器の器種組成において欠かすことができないものであったといえる。

キーワード 手持ちヘラケズリの坏、器種組成、九州中部の出土分布、共伴関係

1 はじめに

鹿児島県出水市福ノ江町の前原遺跡で土師器の坏が完形で出土した。外面は手持ちヘラケズリ成形で、口縁部形状や体部のふくらみなどから、当初7世紀の「須恵器模倣坏」ではないかと考えられた。鹿児島県内における手持ちヘラケズリ成形の土師器の坏の出土例は少なく、九州では熊本県を中心に多くみられる状況である。

土師器の坏において手持ちヘラケズリ成形は、回転台の成形（ヘラ切離）よりも古い製作技法であり、古墳時代後期から古代における重要な製作技法のひとつである。本資料に着目することで、これまで明確でなかった古墳時代後期から古代への移行期における土器様相を見出すことができる。

本研究では九州中部（熊本）における5世紀から6世紀の土師器の坏の出土状況を把握し、時期ごとの分布状況や遺構内遺物の共伴関係について検討を行う。そこから前原遺跡の出土資料について考えたい。

2 研究史

土師器研究の代表的なものでは、平城宮跡および藤原宮跡の発掘調査の成果、そこから出土した資料の詳細な編年研究がある（西1986）。これは須恵器と土師器の形態的特徴と法量から分類を行い、型式設定を行ったもので、古墳時代から9世紀にかけて各時期の土器様式の特徴を捉えて総合的に研究されたものである。

九州では主に九州北部の大宰府を中心とした編年研究

が多く、牛頸窯跡群や朝倉窯跡群などの須恵器研究や、古代末から中世の土師器・須恵器・陶磁器の器種分類などが多くなされてきた。近年では資料の増加に伴い、各地域の古墳時代後期の土器様式の編年研究なども盛んに行われている（林田2002、中村直2002）。

九州中部の古墳時代後期研究では、大江遺跡群（6世紀後半から9世紀）の資料を対象とした編年研究があり、細分された時期ごとに各器種の特徴が示されている（網田1993）。この研究により6世紀後半から9世紀にかけて各遺構から出土する器種の形態的変遷など、おおまかな流れを把握できるようになった。須恵器と共伴して出土した「須恵器模倣坏」は6世紀後半から出現するとされており（網田1993）、それ以降の詳細な編年研究は示されていなかった。

その後5世紀から7世紀の須恵器・土師器研究を基に新たに編年案が提示された（林田2002）。これは熊本平野の塚原古墳群を中心とした地域を対象としたものである。5世紀から7世紀にかけて主要器種である甕・壺・高坏のほか、坏についても検討されており、各器種の形態的変遷が理解しやすいものとなっている。また従来の研究では明確に示されていなかった器種のバリエーションを踏まえて検討されており、各時期の土器の変遷・特徴を考えるうえで重要な研究といえる。

また、九州を4つの地域（九州北部・九州東部・九州中部・九州南部）に分け、5世紀から7世紀の編年研究もなされている（舟山1997、2003）。ここでは5世紀代

の特徴として、口縁部が内湾する布留式系の甕、口縁部が外側に開く二重口縁の壺、そして丸底の長頸壺などが普遍的にみられるとしている。そして、5世紀後半の資料では、塚原古墳群丸山3号墳の資料を提示しており、須恵器と土師器が良好な状態で出土している状況や須恵器の高坏が陶邑編年のTK23型式、I型式4段階に比定されるとしている。しかし、林田編年では同資料を5世紀初頭に位置づけているため、研究者間で見解が異なる状況である。また舟山編年で5世紀前半に位置づけられている竈門寺原遺跡1号墓についても林田編年では5世紀中頃に位置づけられている状況である。6世紀では、甕が長胴化する傾向があり「須恵器模倣坏」は内外ともに黒色を呈している。これは網田編年でも述べられており、この時期の特徴といえる。

そのほか熊本県（肥後）における須恵器の分布状況に関する研究もみられる（木村2009）。これは5世紀代（TK47型式併行期）の須恵器を集成したもので、9つの地域に分けて検討されている。須恵器は古墳の墳丘上で行われる祭祀に使用されるために導入され、生活の場においては貯水機能の高い器種である甕が導入されたとしている。その後、蓋坏などの器種が徐々に取り入れられ、この時期は土師器が中心的な役割を果たしていたとしている（木村2009）。

九州南部における古墳時代中期・後期の土師器研究では「成川式土器」に関する研究が多くなされている（中村直1997・2002, 相美2004・2014, 橋本編2015）。坏に着目された研究では甕（辻堂原式・笹貫式段階）・須恵器模倣坏・甗のセット関係について検討がなされている（中村直2004）。①薩摩半島から鹿児島湾岸部では須恵器模倣坏が少ないこと②坏形の鉢は深いものが存在し、浅いものは平面形や楕円形を呈するなど、土師器的な様相が希薄であるとしている。また、古墳が存在しないえびの盆地においては甗と「須恵器模倣坏」が多く導入されることも述べられている（中村直2004）。こうした研究成果からも、南部九州においては「須恵器模倣坏」が少ない状況であることがわかった。

5世紀代で坏を伴う良好な一括資料は吹上小中原遺跡住居跡4号や芝原遺跡土坑15号などがある。芝原遺跡土坑15号では、口縁部が内湾し体部は指ナデで器面調整を行った後、ヘラケズリ調整がなされているものが出土している。報告書では「伝統的V様式を示すもの、熊本県中北部との交流を示す」とされ、竪穴住居跡13号からも搬入品と思われる肥後系の丸底甕と口縁部外面に櫛描波状文が施された小型丸底壺が出土している（鹿児島県立埋蔵文化財センター2013）。これらは九州中部との関係を示す重要な資料と考えられる。

このように坏あるいは壺の出土例はみられるものの、九州南部においては少ない状況である。これまで7世紀

から12世紀の須恵器・土師器について広く概観した研究や、薩摩国と大隅国の食膳具の変遷研究などもあるが（中村和1994, 1997, 2006）、古墳時代から古代への移行期において土師器の明確な変遷を追う研究は少なく、須恵器が伴う8世紀以降の須恵器・土師器研究が多くなされている現状である。

（1）網田編年（1993）

遺構や遺物の年代を「奈良時代・平安時代」とあいまいにしてきた現状を指摘し、大江遺跡群の遺構からまとまって出土した資料の時期設定を行っている。また、周辺遺跡で出土した資料とあわせて検討されている。編年案での器種は須恵器と土師器の坏・蓋・高坏を主として提示されており、甕・壺・甗などは割愛されていた。時期設定は6世紀後半から9世紀にかけて、大江1期から大江15期まで細分されている。

（2）林田編年（2002）

5世紀を5つの時期、6・7世紀を2つの時期に細分しており、甕・壺・高坏・坏についてどのように変遷するのかについて編年案を提示している。甕をA～C, 壺をA～D, 高坏をA～D, 坏をA～Gと分類しており、それぞれのバリエーションを考慮して検討されている。①5世紀末は須恵器の出土例が増加し、器種は蓋坏・高坏に偏る傾向がある②産地は陶邑産の搬入後、宇城窯跡群で在地生産が開始されるとして須恵器の産地なども考慮されている。

（3）舟山編年（2003）

九州を4つの地域にわけ、それぞれの地域的な特徴を述べている。5世紀から6世紀前半の編年が提示され、網田編年で割愛されていた土師器の甕・甗が含まれている。しかし器種のバリエーションが少ない点や時期設定がおおまかな点が指摘できる。また、竜田陣内遺跡住居跡1号から出土した「須恵器模倣坏」については6世紀後半に位置づけており、林田編年で「須恵器模倣坏」が6世紀前半に出現することに対して批判的である。大江遺跡群住居跡5号の出土資料については6世紀後半に含まれており、網田編年や林田編年と同じ見解となっている。

（4）本研究の目的

こうした九州中部における研究を踏まえたうえで、5世紀から6世紀の資料収集を行い、遺構内における器種の共伴関係について検討を行う。また、本資料が伴う遺跡の分布状況を時期ごとにみていく。そこから地理的にどのように変遷するのかを示したい。そして前原遺跡で出土した資料の明確な時期や九州中部の出土資料との比較・検討を行う。

3 資料・方法

まず熊本県内の報告書から本資料の出土状況の把握を

行った。その際、堅穴住居跡などの遺構から出土した一括資料を中心として資料を収集した。また、古墳や墳墓などからも出土状況がみられたため、それもあわせて検討した。資料の時期については、大江遺跡群の網田編年(1993)を参考にした。古墳や墳墓などから出土した資料で時期的な判断が難しいものについては便宜的に大阪陶邑の須恵器編年(中村浩 1981, 田辺 1981, 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006)を考慮して検討を行った。また、網田編年で割愛された器種や、土器の形態的変遷については林田編年(2003)が理解しやすいことから、これらを参考にした。ただし、編年に用いられた遺跡・遺構については研究者間で時期の位置づけが異なる状況であったことから改めて検討する必要があった。その際、古墳時代前期末から5世紀中頃の全国各地域の土師器の併行関係についての研究がなされていたため(久住 2015), それも考慮している。

また、各遺構から出土した遺物について数量の把握も行った。破片資料などは除き、できるだけ完形に近い資料を1としてカウントした。そこから各時期の遺構内遺物において須恵器・土師器にどのように差異がみられるのか数量の比較・検討もあわせて行った。

4 結果・考察

(1) 5世紀の遺物出土状況と分布(図1)

5世紀では菊池市の菊池川中・下流域、宇城地域と八代市の球磨川下流域にもみられることから2つの地域に分けられる(図1)。5世紀代の須恵器の分布では9つの地域に分けられているが(木村 2009), 北部と南部に大きく分布が分かれる状況であった。

北部に位置する島田遺跡土坑4号では在地の甕・布留式甕・二重口縁壺・高坏・坏・小型丸底壺・小型器種が出土している(図5)。須恵器は共伴していないが、初期須恵器併行期の各地の土師器(久住 2015)に示されている上の原遺跡住居跡19号・49号の布留式甕の形状や二重口縁壺の口縁部形態、器種のセット関係が類似していることから5世紀前半の時期と判断した。また上の原遺跡の同資料は林田編年において5世紀中頃と位置づけられている。

南部に位置する中小野遺跡の堅穴住居跡3号では須恵器の甕・坏身が出土し、坏身の蓋受けの立ち上がりから5世紀後半(TK23段階, I型式5段階)のものと考えられる(図7)。

土師器では甕・高坏・坏・台付甕(鉢)・甑が共伴している。ここで重要なのは、前原遺跡土坑4号で出土した坏と台付甕(鉢)が上述した遺跡から出土していることである。このことから手持ちヘラケズリ調整の土師器の坏と台付甕(鉢)を伴う時期が少なくとも5世紀中頃から後半の時期であることが明らかとなった。そして生

活に欠かせない煮沸具や食器として考えられるものとして主要器種のほかに坏・台付甕(鉢)・小型丸底壺・小型器種があることがいえる。またそれらの器種数も多い傾向で、小型丸底壺や小型器種のバリエーションも多い傾向である。また、5世紀代の器種の数量を把握し比較・検討したところ、林田編年で述べられているように5世紀末の特徴には須恵器の出土例が増え、器種は蓋坏・高坏に偏る傾向や甑が認められる。

(2) 6世紀の遺物出土状況と分布(図2)

6世紀も同様に菊池川沿いの分布が確認できたが、八代市の球磨川流域ではみられない状況である(図2)。6世紀前半に相当する遺構は少ないため、良好なセット関係をつかみにくい状況(林田 2002)とあるように、その時期に相当する資料が少ない状況であった。そのため6世紀中頃からの資料を提示している(図8)。

この時期では一つの遺構から出土する器種は、数やバリエーションが少なく、甕・高坏・土師器の坏・甑が主に出土している状況であった。5世紀でみられた小型丸底壺やミニチュア土器などの器種が少なく、新たに鍋がみられる傾向がある。舟山編年では6世紀前半に大江遺跡住居跡5号出土資料を提示している。これは網田編年・林田編年で6世紀後半に位置づけられている。

このように時期設定が異なる状況であるが、明確に6世紀前半とされる遺構がみられない状況である。林田はこの時期の特徴として造り付け竈をもち、須恵器模倣坏でも坏蓋・坏身が一定量存在するとしている(林田 2002)。

6世紀後半は、須恵器の蓋は見受けの返りをもたず、小型化する。高坏も低脚化する傾向で、有蓋高坏の脚部には透かしがみられない傾向がある(網田 1993)。

土師器では須恵器模倣坏がみられ、黒色を呈するものや丁寧なヘラミガキ調整のものがみられる。竜田陣内遺跡住居跡1号からは須恵器と須恵器模倣坏が出土しており、形状が非常に類似している状況であった。甕の口縁部はゆるく外反し、胴部は長胴化している。この時期の甕の長胴化については竈の普及に伴うものとされている(林田 2002)。迫ノ上遺跡住居跡9号では土師器に須恵器の蓋坏が共伴しており、林田編年や舟山編年において6世紀後半に適した資料として提示されている。

(3) 塚原古墳群丸山3号墳に伴う資料から(図7・9)

熊本市の塚原古墳群丸山3号墳では須恵器の甕、大型の高坏形器台、高坏と坏蓋のセット、坏蓋、坏身が出土している状況であった。土師器では甕、丸底の長頸壺、小型器種のほか坏が多く出土している状況であった。高坏(三角形の透かし)の特徴、坏蓋のつまみの形状や坏身の蓋受けの立ち上がりとその長さから中村浩編年のI型式4段階の時期のものと判断した。また、大型の高坏形器台(脚部に三角形の透かしが同列に3段、櫛描波

状文)は田辺編年のTK23段階のものと考えられたことから5世紀後半と判断した。

また、ここで共伴した坏は林田編年の坏A～坏Cに相当し、多くが口縁部をナデ調整、体部を手持ちヘラケズリ調整されている。前原遺跡で出土した本資料は、口縁端部が短く外反し、体部のふくらみ・丸みなどから坏C類で、林田編年の4期から5期のものと考えられる。こうした形態的特徴や調整などが類似しており、本資料が5世紀中頃から後半であると判断することができた。また、古墳や墳墓に伴う須恵器には多様な器種が多く、土師器の器種では坏が必ず共伴する状況がみられた。こうした状況から土師器の器種のなかで坏は重視されていた可能性が考えられる。

(4) 人吉盆地周辺の遺跡から

熊本県中部でも成川式土器が散見される(舟山2003)とあるように、人吉盆地周辺でも成川式土器が出土している。アンモン山遺跡・夏目遺跡・沖松遺跡の出土資料を用いて編年研究がなされており(木崎1997)、それをもとに九州南部との併行関係が述べられている(中村直2000)。

沖松遺跡竪穴住居跡15号の出土資料(図7)は沖松Ⅲ式(木崎1997)とされ、辻堂原式併行とされている(中村直2000)。須恵器の壺や土師器の坏が出土しており、この時期の器種組成は甕・壺・高坏・埴が中心とされている。また、笹貫式併行期では坏主体の器種組成(中村直2000)はみられないことが指摘されており(相美2004)、結果として九州南部では、辻堂原式併行期に坏が認められ、笹貫式併行期では坏を伴う比率は高くなるが、それが器種組成において主体とはならないことが指摘されている(相美2004)。

須恵器の壺は田辺編年のTK23段階と思われ、土師器の坏は林田編年において坏C類の4期に相当すると考えられる。

以上のように本資料はこれまで述べてきた九州中部の出土状況や前原遺跡に比較的近い人吉盆地周辺遺跡の出土例からも古墳時代中期から後期(5世紀中頃から後半)のものと判断した。また辻堂原式期には遺構内で坏を伴う比率が低いとされており(相美2004)、そうした状況において完形で出土した本資料は重要であったといえる。

5 おわりに

5世紀から6世紀の九州中部の分布状況と遺構内遺物の出土状況をみていくことができた。編年案においては時期設定を明確に示すことが重要であると考えられるが、須恵器と共伴する資料が少ないなかで古墳時代中期における一様相を示すことができたといえる。また、前原遺跡で出土した坏と台付甕(鉢)のセットが九州中部

においても5世紀にみられることが明らかとなった。5世紀後半では九州中部・南部と相互に人やものの動きがあったと思われる、そのなかで坏が重視されていたのではないだろうか。

謝辞

本研究を進めるにあたり、中村和美氏に土師器の坏の重要性やそのものの魅力を教えて頂きました。また内容についても、ご指導・ご指摘を頂きました。感謝申し上げます。

【参考・引用文献】

- 網田龍生 1993「V考察」『大江遺跡群Ⅱ』熊本市教育委員会
網田龍生 1994「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』X 京都：真陽社
大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさしー陶邑の須恵器ー』大阪府立近つ飛鳥博物館
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005「農業開発総合センター遺跡群Ⅰ」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(83)
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2013「芝原遺跡4」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(178)
木村龍生 2009「熊本県地域における須恵器の受容と展開」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』熊本古墳時代共同研究グループ
久住猛雄 2015「土師器」の中の「成川式」土器ー中津野式から辻堂原式にかけてー『成川式ってなんだ？ー鹿大キャンパスの遺跡から出土する土器ー』鹿児島大学総合研究博物館
相美伊久雄 2004「成川式土器」の器種組成について(予察)ー坏形土器の様相を中心にー『縄文の森から』第2号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
相美伊久雄 2014「南九州東端域における7～8世紀の土器様相ー志布志湾北岸域の甕形土器を中心にー」『新田栄治先生退職記念論文集』新田栄治先生退職記念事業会
中村和美 1994「鹿児島県(薩摩・大隅国)における平安時代の食器についてー土師器の変遷を中心にー」『中近世土器の基礎研究X』京都：真陽社
中村和美 1997「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号 鹿児島県考古学会
中村和美 2006「土師器と須恵器」『先史・古代の鹿児島』通史編 鹿児島県教育委員会
中村直子 2002「薩摩・大隅」『古墳時代中・後期の土師器ーその編年と地域性ー』第5回九州前方後円墳研究会発表資料集
中村直子 2004「古墳時代における南部九州在地土器と土師器との関係性」『新しい関係性を求めてコミュニケーションのかたちーことば・もの・メディアー』鹿児島：斯文堂
西弘海 1986『土器様式の成立とその背景』京都：真陽社
橋本達也編 2015『成川式ってなんだ？ー鹿大キャンパスの遺

跡から出土する土器一』鹿児島大学総合研究博物館

林田和人 2002「肥後における中・後期の様相」『古墳時代中・後期の土師器一その編年と地域性一』第5回九州前方後円墳研究会発表資料集

舟山良一 2003「九州地方の土器」『考古学大観』第3巻 東京：小学館

熊本県教育委員会 1975「塚原」『熊本県文化財調査報告』(16)

熊本県教育委員会 1980「中小野・矢ノ下・目抜・アケサン遺跡」『熊本県文化財調査報告』(39)

熊本県教育委員会 1985「西谷遺跡」『熊本県文化財調査報告』(76)

熊本県教育委員会 1987「袈裟尾丸山古墳」『熊本県文化財調査報告』(89)

熊本県教育委員会 1988「竜田陣内遺跡」『熊本県文化財調査報告』(98)

熊本県教育委員会 1993「柏木谷遺跡」『熊本県文化財調査報告』(134)

熊本県教育委員会 1994「深水谷川遺跡」『熊本県文化財調査報告』(141)

熊本県教育委員会 1995「竈門寺原遺跡」『熊本県文化財調査報告』(149)

熊本県教育委員会 1996「西片町遺跡」『熊本県文化財調査報告』(153)

熊本県教育委員会 1996「沖松遺跡」『熊本県文化財調査報告』(154)

熊本県教育委員会 1997「庵ノ前遺跡Ⅲ」『熊本県文化財調査報告』(160)

熊本県教育委員会 1998「楠ノ木遺跡」『熊本県文化財調査報告』(139)

熊本県教育委員会 1999「迫ノ上遺跡」『熊本県文化財調査報告』(170)

熊本県教育委員会 1999「石の本遺跡Ⅰ」『熊本県文化財調査報告』(177)

熊本県教育委員会 2001「柳町遺跡Ⅰ」『熊本県文化財調査報告』(200)

熊本県教育委員会 2002「平松遺跡・塚園古墳群」『熊本県文化財調査報告』(208)

熊本県教育委員会 2002「大江遺跡群Ⅳ」『熊本県文化財調査報告』(211)

熊本県教育委員会 2004「東鶴遺跡」『熊本県文化財調査報告』(178)

熊本県教育委員会 2007「島田遺跡」『熊本県文化財調査報告』(241)

熊本県教育委員会 2007「西片百田遺跡」『熊本県文化財調査報告』(242)

熊本県教育委員会 2010「小園遺跡」『熊本県文化財調査報告』(253)

熊本県教育委員会 2011「稲佐津留遺跡」『熊本県文化財調査報

告』(263)

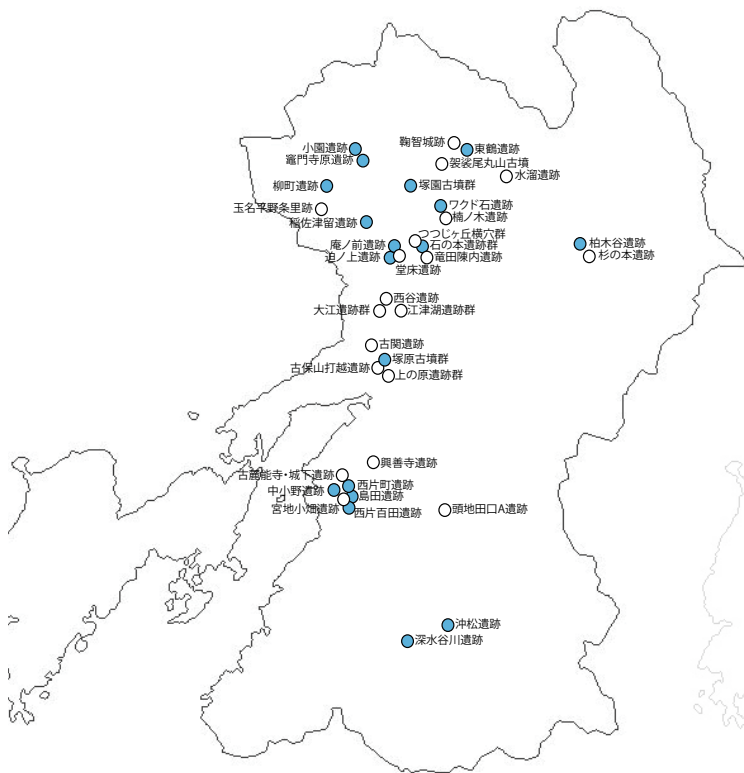


図1 5世紀代の遺跡分布図

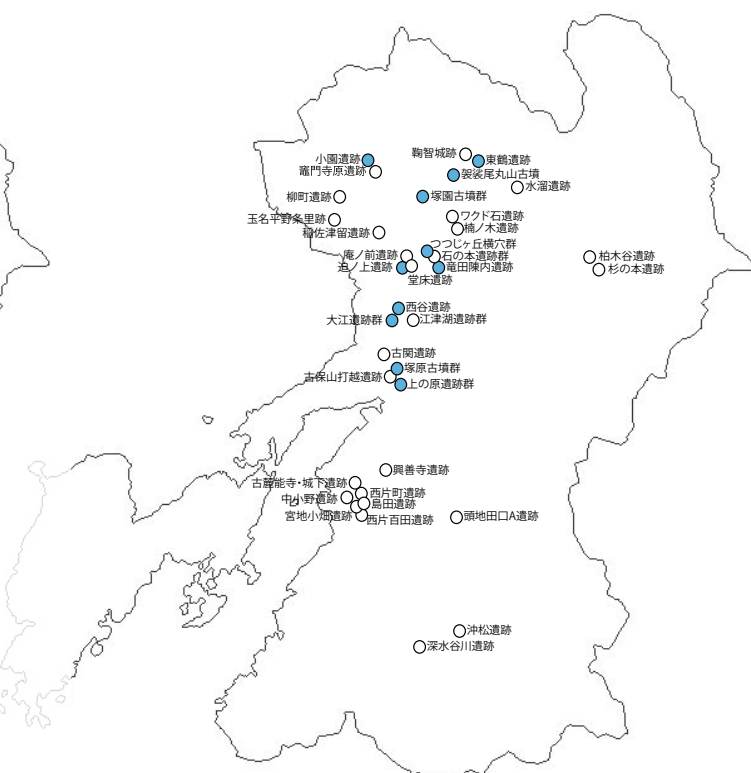


図2 6世紀代の遺跡分布図

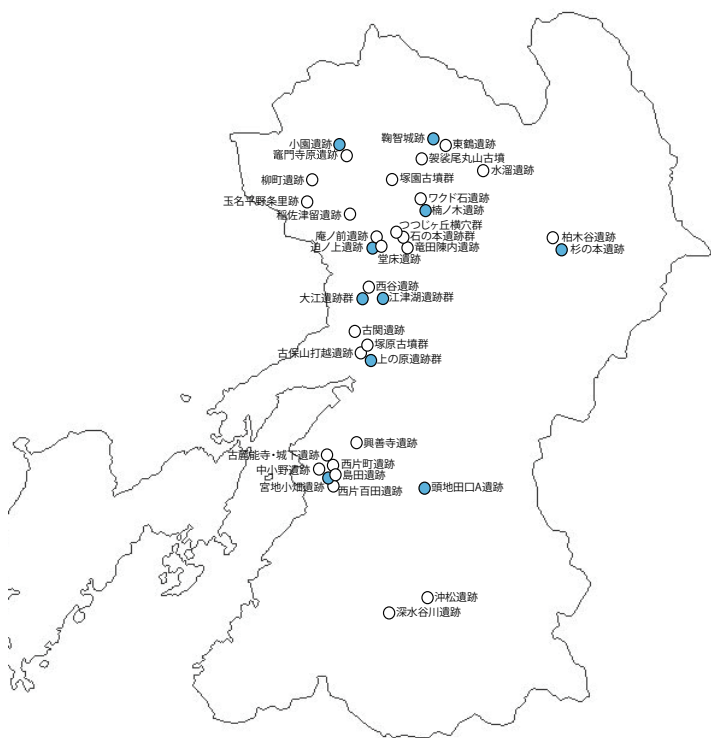


図3 7世紀代の遺跡分布図

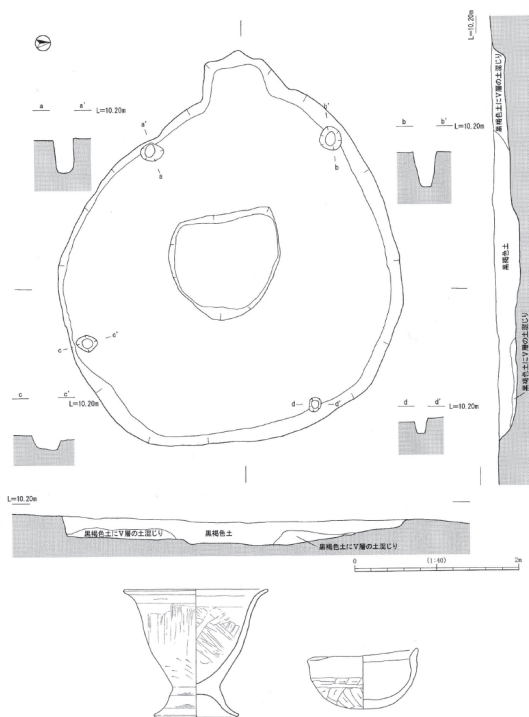
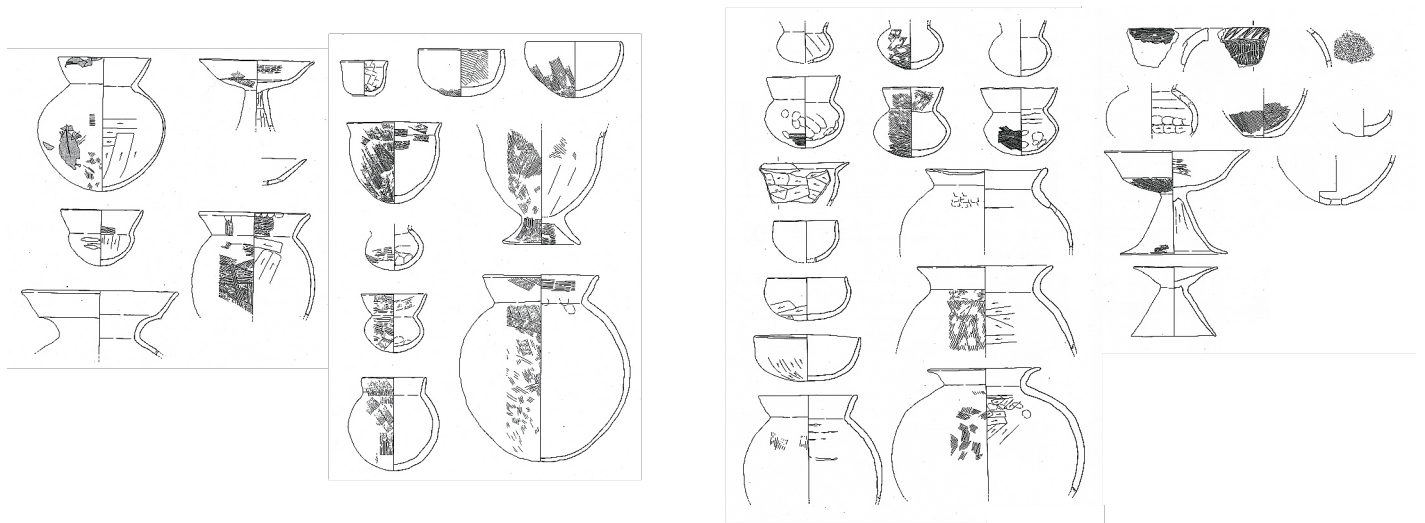
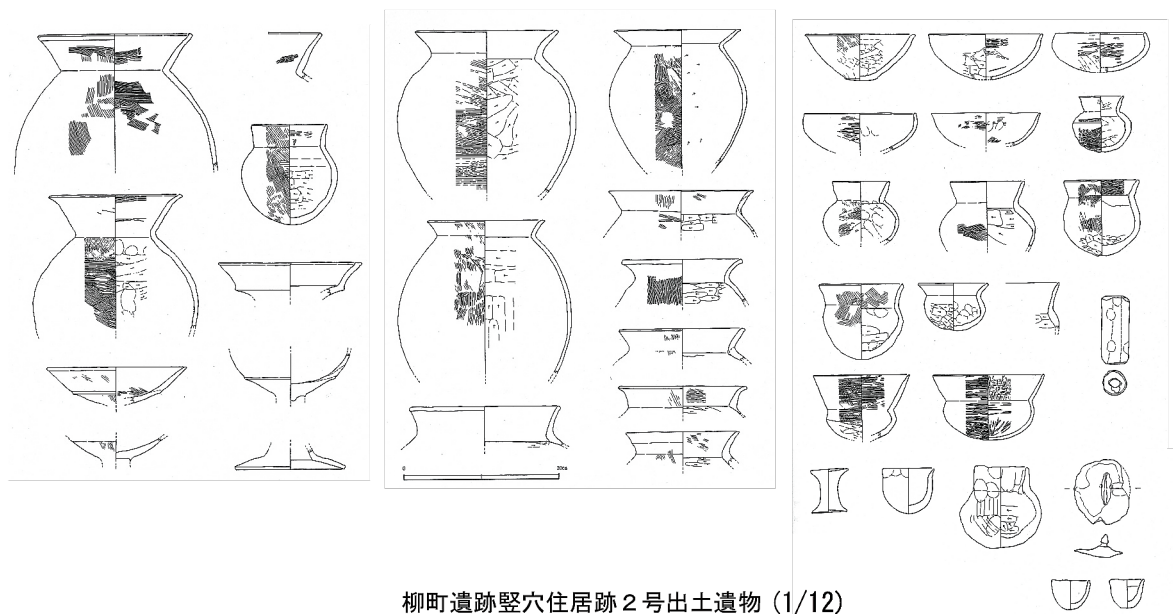


図4 前原遺跡土坑4号および出土遺物

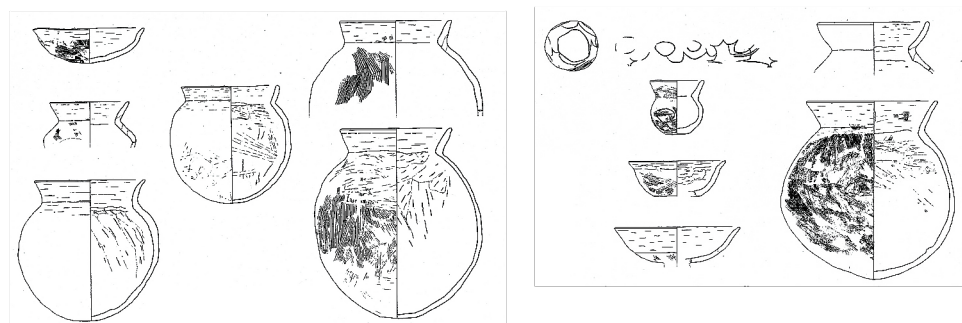


島田遺跡土坑4号出土遺物 (1/12)

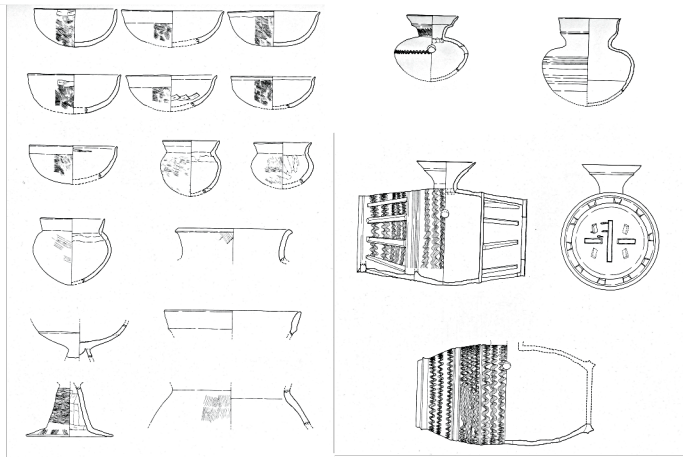
小園遺跡竪穴住居跡33号出土遺物 (1/12)



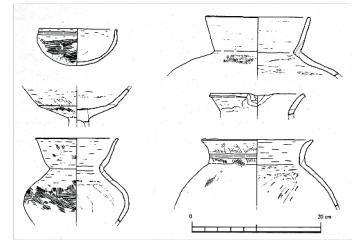
柳町遺跡竪穴住居跡2号出土遺物 (1/12)



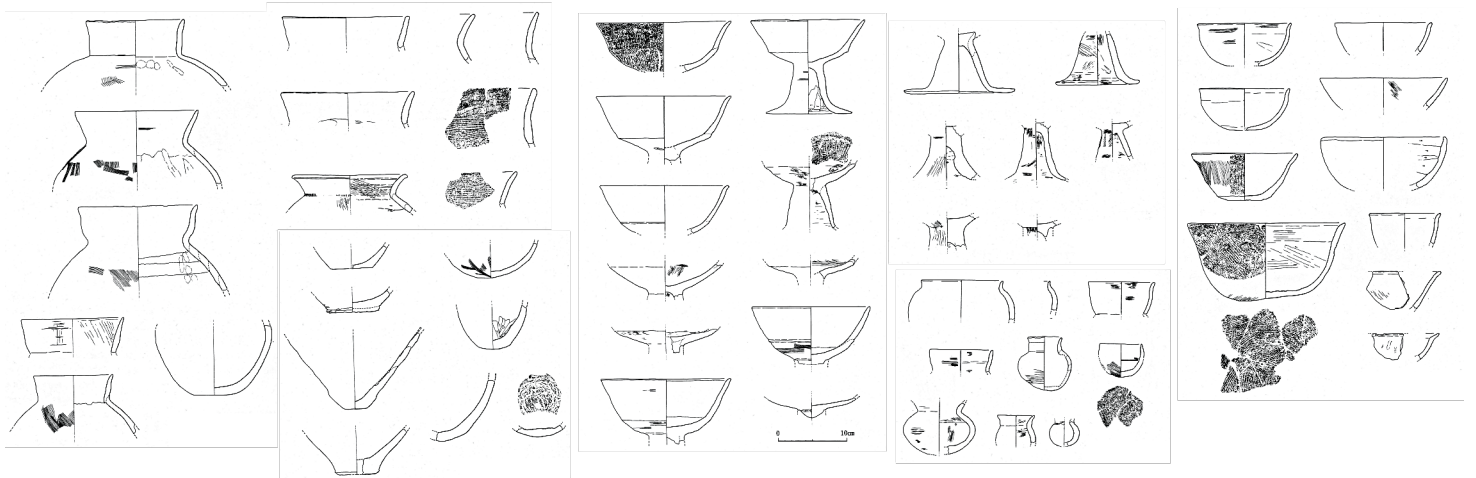
石の本遺跡住居跡4号・5号出土遺物 (1/12)



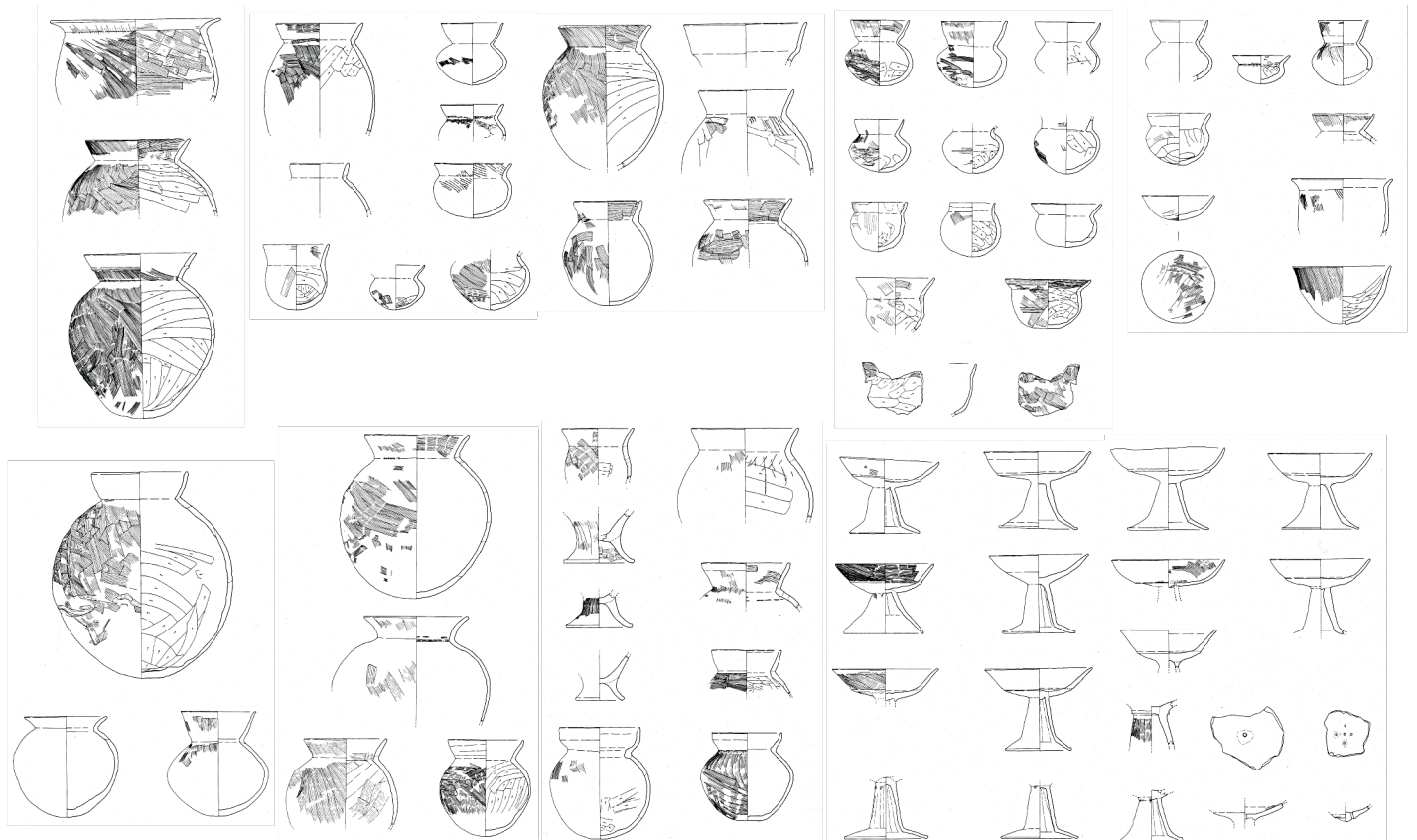
竈門寺原遺跡 1 号墳出土遺物 (1/12)



石の本遺跡住居跡 2 号出土遺物 (1/12)

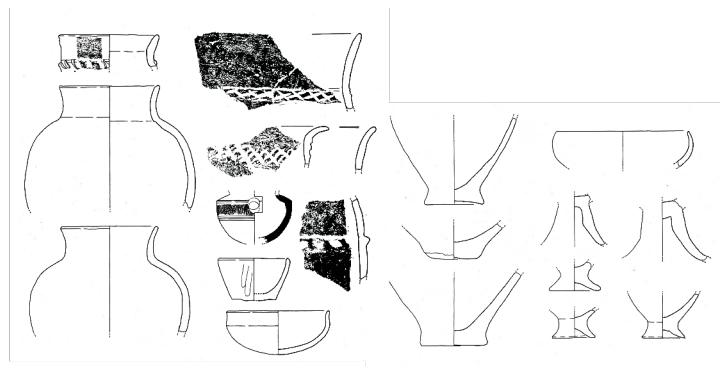


深水谷川遺跡住居跡 2 号出土遺物 (1/12)

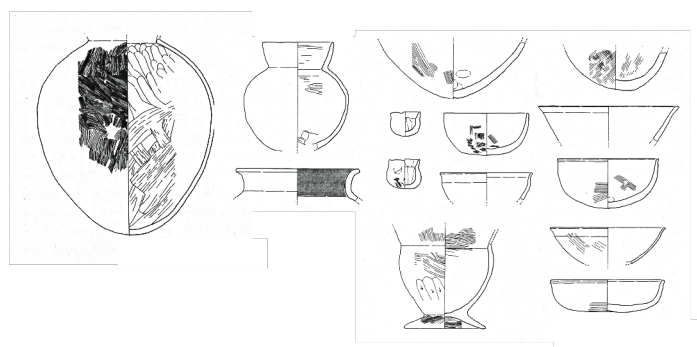


西片百田遺跡住居跡 15 号出土遺物 (1/12)

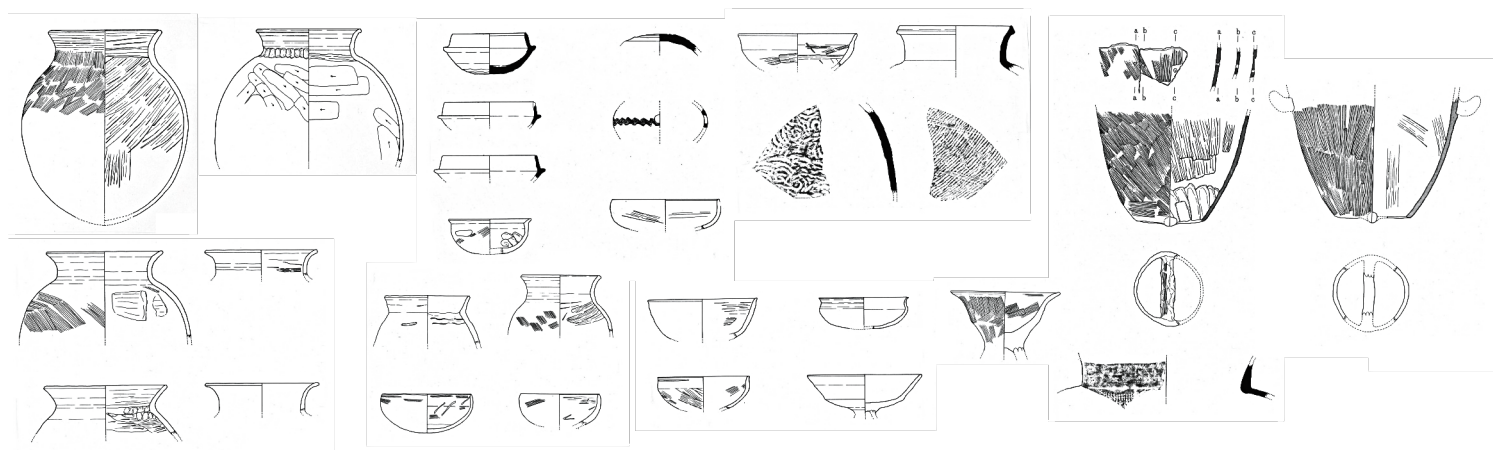
図 6 5 世紀前半から中頃の土器群



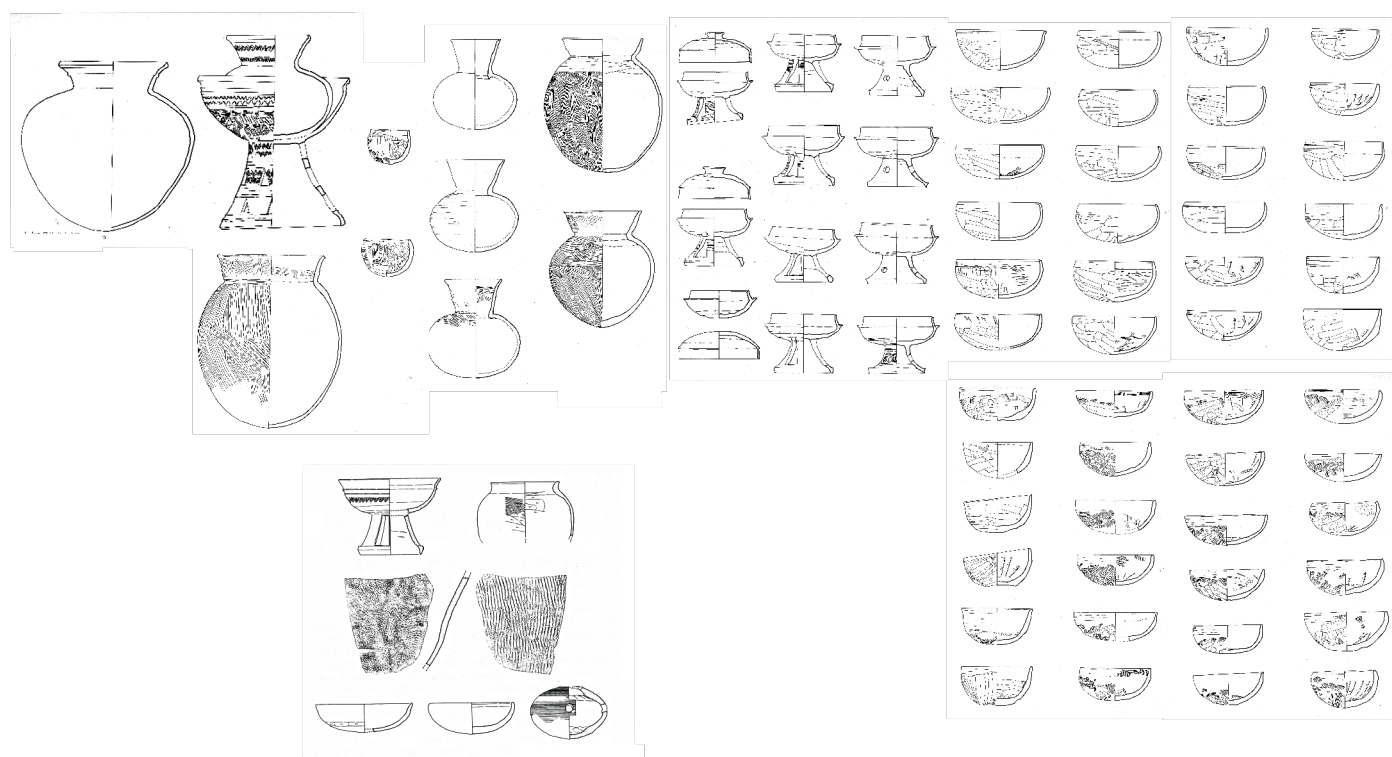
沖松遺跡 15 号墳出土土遺物 (1/12)



庵ノ前遺跡住居跡 3 号出土土遺物 (1/12)



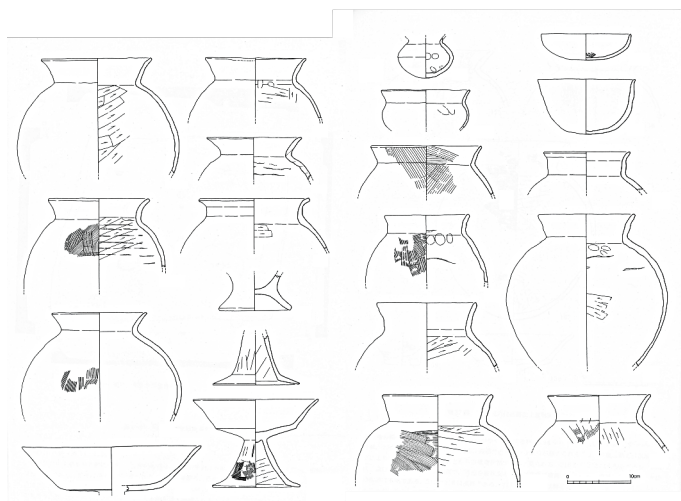
中小野遺跡住居跡 3 号出土土遺物 (1/12)



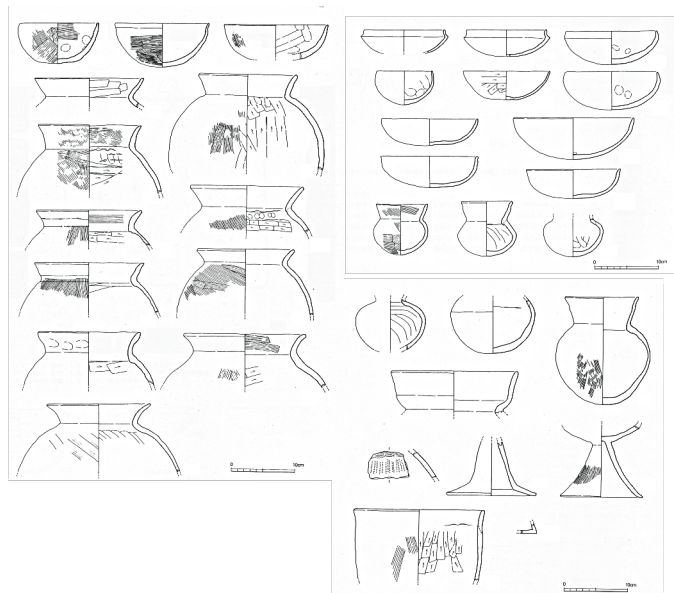
塚園古墳群 4・5 号墳出土土遺物 (1/12)

塚園古墳群丸山 3 号墳出土土遺物 (1/12)

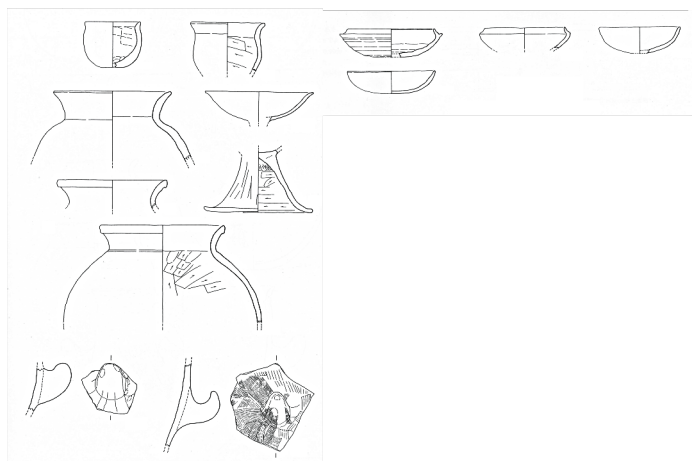
図 7 5 世紀中頃から後半の土器群



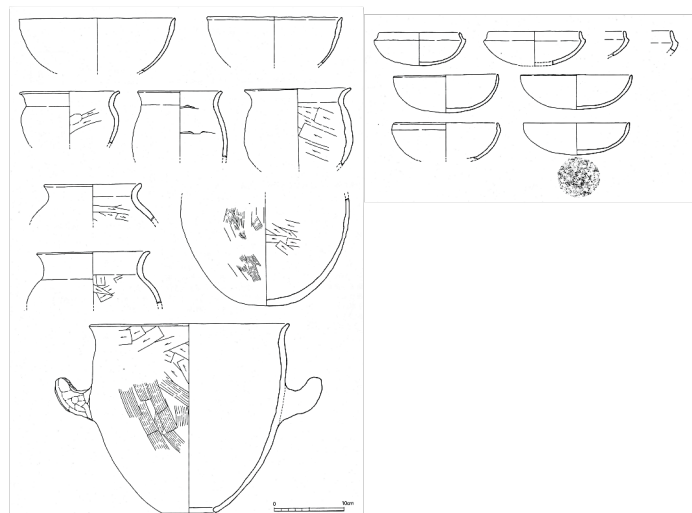
小園遺跡竪穴住居跡 35 号出土遺物



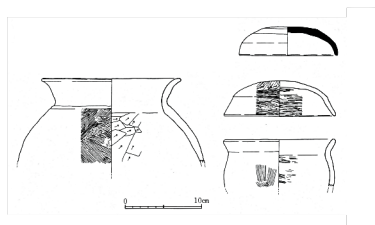
小園遺跡竪穴住居跡 34 号出土遺物



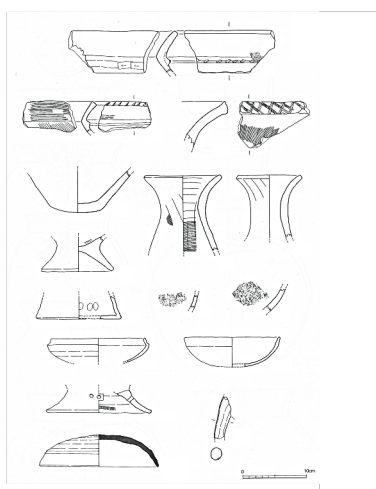
小園遺跡竪穴住居跡 36 号出土遺物



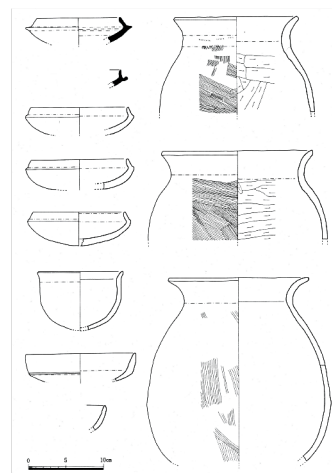
小園遺跡竪穴住居跡 37 号出土遺物



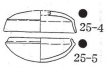
迫ノ上遺跡住居跡 9 号出土遺物



小園遺跡住居跡 27 号出土遺物



竜田陣内遺跡住居跡 1 号出土遺物

1 期	坏類 A
2 期	 A b 6-6  A a 7-7  B a 7-8  C a 7-9
3 期	 A a 13-5  B b 11-12  C b 14-2  A b 11-13  B b 14-1  C a 14-3  A a 11-14
4 期	 A a 15-3  B b 15-4  C a 15-5  A a 17-8  B b 16-6  C b 17-9
5 期	 A a 19-4  B a 19-5  C b 20-3  B b 23-2  C a 23-3
6 期	 B a 25-3  25-4  25-5
7 期	 B a 27-3  29-4  31-1  30-1  31-2  31-3
8 期	 B a 34-2  34-3
9 期	 39-1  39-2  39-3  37-2  37-3

形式 型式 特徴

- 坏 A 丸底で口縁は直線的に広がる。体部径<口径
- A a 器高が浅い。
- A b 器高がやや浅い。
- A c 器高が深い。
- 坏 B 丸底で口縁は内湾もしくは直立する。
- B a 器高が浅く体部が直線的。
- B b 器高がやや浅く体部が直線的。
- B c 器高が深く体部は丸みをもつ。
- 坏 C 丸底で口縁端部は短く外反する。
- C a 器高が浅く体部が直線的。
- C b 器高がやや浅く体部が直線的。
- C c 器高が深く体部は丸みをもつ。
- 坏 D 体部に稜をもち肥厚する。模倣坏の影響。
- 坏 E 須恵器模倣坏。蓋と身がある。
- 坏 F 回転台土師器の坏。須恵器技法による製作。
- 坏 G 内面に放射状の暗文を施すもの。



類例：塚原古墳群丸山 3 号墳出土の坏



5 世紀前半

5 世紀中頃

5 世紀後半

5 世紀末

図 9 坏の形態的変遷（林田編年 2003 より抜粋・改編）

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第9号

発行年月 2016年12月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <http://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1
